



No. 11

2002 - 11 - 25

日本蜘蛛学会



インフォメーション

会長選挙・評議員選挙

開票結果

さきに行なわれました次期会長および評議員選挙の開票結果を報告いたします。

会長選挙

投票総数 69 票 (うち白票 3 票)

有効投票数 66 票

当選 吉田 真 45 票

次点 小野展嗣 6 票

評議員選挙

投票総数 690 票 (うち白票 47 票, 無効 4 票)

有効投票数 639 票

1. 新海栄一 44 票

2. 谷川明男 44 票

3. 池田博明 42 票

4. 加村隆英 37 票

5. 田中穂積 26 票

6. 鶴崎展巨 25 票

7. 宮下 直 25 票

8. 松田まゆみ 23 票

9. 榎元敏也 20 票

10. 緒方清人 19 票

次点 西川喜朗 18 票

次点 青木淳一 16 票

会長選挙および評議員選挙 選挙管理委員会

加藤輝代子・佐藤幸子・工藤泰恵



トピックス

加治木クモ・フェスタ

2002 報告

—くも合戦の町でみつけた宝もの—

八幡明彦 (同フェスタ・実行委員)

学会大会に並行して、地元自治体と共催で市民向けの「クモの祭典」を開く。町ぐるみの「くも合戦」の伝統行事で知られる加治木町ならではの企画の話が持ち上がったのは、2年前の6月、吉田真会長が合戦を訪れた際の飲み会での話しからだった。あれもやってみたい、これもやってみたいと次から次へとアイデアの湧く(くも合戦文化の研究者でもある)斎藤慎一郎さんと、会長には「文系の生物屋」と評される(これまた異色の学会員)八幡の二人が、加治木町の大ファンとして実行委員に加わった。

準備の苦労話は省略して、フェスタ前日(22日)。小澤實樹さんのコーディネートで、会員内外から集められたクモ写真・網アート、資料、クモグッズなどの数々が展示会場に広げられた。出品に協力してくださった方々は、新海栄一、緒方清人、谷川明男、加村隆英、梅林力(以上写真)、故・高橋 登、斎藤慎一郎、須賀瑛文、貝發憲治(以上資料)、船曳和代、中程悦子、小澤實樹(以上アート)、笹岡文雄、石井幸子、入江照雄、井出和美(以上グッズ)、八幡(折り紙、タランチュラ生体)の各氏(敬称略)。出品者自





クモの網を作ってみよう

らが大会前々日にかけて展示会場の飾りつけを行なった。町が町内全戸に新聞折込みで宣伝した効果もあり、23日の開場当初より訪れる人は絶えず、みな興味深く展示を見ておられた。会場の番をしてくださったのは、町農振課の職員ですでに学会員でもある中原さんだが、出品者に尋ねつつ替わって解説をしてくださるうちに、「ずいぶんクモのことが勉強になりました」と言っておられた。

素晴らしい設備の「加音ホール」を会場に大会・フェスタ。入り口には、「お遊び広場」と称するクモ切り紙の飾りつけが自分のできるコーナーがあり、子どもたちを集めて、新海明さんによる「クモの網を作ってみよう」という水平円網をテープで張ってみるといった企画も行なわれた。

23日夕刻より、フェスタの開会の式に続いて、町民対象の親子クモ観察会が持たれた。2年前より八幡がくも合戦のたびに訪れては下見をしていた町内の「金山橋」周辺の里山をコースに準備し、27人の親子の参加で、学会員有志と一緒に、1時間余りのクモ観察を行なった。「クモといえばコガネグモ」である町の子どもたちは、初めて注意して見る様々なクモの形態や生態に、目を輝かせた。キムラグモ、スズミグモ、トリノフンダマシ類3種が出るなど、学会員にとっ

ても楽しい観察会だった。特にキムラグモは、鹿児島で記載されたクモでもあり、巣穴から覗く脚先だけを見た子どもたちは、観察会を終えてフェスタ会場に戻るなり、展示された写真を見に走っていった。宅地化が進む加治木町において、まだ残された良好な里山環境にはクモをはじめたくさんの生き物が棲んでいることを踏まえ、町民の皆さんが「クモの住める素敵な自然は、人にとっても豊かな自然」(フェスタ・テーマ)という町の宝を大切にしたいと訴え、会を終えた。

大会第一日目、クモフェスタの中日24日には、シンポジウム「くも好き文化とくも嫌い文化」が持たれた。主題講演「古代土蜘蛛の正体とは」に、横尾文子さん(佐賀女子短期大教授)。しばしばクモ嫌い文化の源流とむすびつけられる古代の「土蜘蛛」とは、ヤマト朝廷の支配に屈しなかった地域の豪族勢力で、自らの土地を守ることに長けていた誇り高い一族、「穴に棲むクモの巣のような奥まった地形に身を隠し、夜陰に乗じて攻めてくる、つわものたち」という意味で、中央政権が畏怖と憎しみのまじった用語として「土蜘蛛」と呼んだのだろう、との分析。単なる「ならず者」ではない、土地を愛する地域の人々の姿が彷彿とされた。続くパネルー、野村育世さん(歴史研究者)「クモを愛づる



シンポジウム「くも好き文化とくも嫌い文化」



クモ合戦のデモンストレーション

文化」, 新福 真さん(くも合戦保存会長)「加治木町のくも合戦の歴史と現状」, 須賀瑛文さん「近代文学に現れたクモ」, 吉田 真さん「ゴケグモ騒動からみた日本人のクモ観」は、いずれも示唆に満ちた研究の成果を紹介したもので、司会者・パネラー・会場のやりとりも熱く続いた。戦後焼け野原となった加治木町で、はじめての町の行事として復活したのがくも合戦だった、という新福さんの証言は、クモを愛し、クモと共に歩んできた町の歴史を感じさせるものだった。ここにシンポジウムの詳細な報告をする紙幅がないため、八幡個人のホームページ (<http://www.mirukashi.com>) で今後、抄録報告を載せる予定だ。

加治木町といえば、コガネグモ合戦の町である。コガネグモのメス成体を棒につかまらせて、はちあわせになったところでケンカが始まる、という「くも合戦」は、数百年の歴史のある伝統行事で、町ぐるみの年中行事(6月第3日曜)として毎年100人以上の参加者がある(ルールの詳細は、学会HPを参照)。優勝を狙う人たちは、鹿児島南部で大型の個体を採ったり、何ヶ月も前から飼育し、予選を行ない強い個体を選び抜いて出場する。今回の学会大会の誘致にあたり、加治木町のくも合戦保存会は、6月の合戦から遅れること2ヶ月のこの時期だが、地元

のコガネグモを準備して、学会員持参のクモとの対戦に応じようと言ってくださった。この呼びかけに応じて、数名の参加者がコガネグモを採ってきてこの日に臨まれた。レセプション開始前の20分を使って、「くも合戦実演 加治木町対蜘蛛学会」という世紀の対決が実現したのである。毎年の行事で司会をつとめる西村さんと、学会側クモの紹介をする八幡が、壇上で掛け合いしつつの進行。「加治木のクモは強いんですよぉ～、おそらく勝負にならないと思います」と繰り返す予言の通り、斎藤慎一郎さんの石川県のコガネグモ2頭が、一瞬でしおり糸を切られて落とされ、敗北。加治木の保存会が準備したクモ同士でやってみると、非常に派手な闘いを繰り広げる。この違いは何なのか。小野展嗣さんが鹿児島県北部で採ったクモは、逃げまわった末に捕帯の糸をまかれて負け。谷川明男さんが加治木に来てから採ったクモも、一瞬で落下。学会側は4連敗の惨敗。「くも合戦はどうせいきあたりばったりの偶然で勝ち負けが決まっているのだろう」と思っておられた方がおられたら、このへんで考えを変えたのではなかろうか。そして、八幡が10日間飼育し、棒上で闘わせる練習試合もしておいた個体(広島産)を出すと、これは健闘し、保存会のクモのしおり糸を切って落とし、みごと一勝をかちとった。「3年間加治木に通った末ですから」とのコメントがうれしい。しかし、2連勝ならず。スタミナ負けで保存会側の大型個体に敗北。「学会の皆さん、来年、出直してください！」勝ち誇ったような西村さんの声。「次は負けてなるものか」と思った方がおられたら、是非来年のクモ合戦へ。

さて、今回の学会、クモフェスタには、くも合戦関連の方で町外から足をはこんでくださった方々がおられるので特に記しておきたい。お



展示のコーナー

一人は、熊本の「くも合戦文化を子どもに伝える会」の藤本宏さん。自然教育の一環としてこれにとりくんでおられる藤本さんは、「もっとクモのことを知らねば」と今回学会員になられて、大会にも出席された。もうお一方は、新聞報道を見て 25 日フェスタ会場に鹿児島県出水市から駆けつけてくださった、昨年の合戦の優勝者・谷口信彦さん。「身近にクモの話ができる人がいないんですが、わたしは一年中コガネグモのことしか考えてません。一生これでいいと思っています」という筋金入りのクモ好きで、優勝に至るクモとの付き合いの秘話を、大会後、参加者有志のまえでお話いただいた。それによると、「闘いは、もうこの時期はじまっています」とのこと。なんと彼は、県内某所の餌が非常に豊富なフィールドで 1 年を通してコガネグモの成長を見守り、周辺から成長のいい個体をそこに集めて放し、高密度の「コガネグモの楽園」を持っているのだ。気候が暖かく、もともとコガネグモの密度が高く成長も早いようで、「秋・冬の間にとれだけ頻りに食べて脱皮して成長したかによって、春のサイズが違ってくる。春にすでに大きい個体から、最終脱皮前にすでに巨大な、優勝候補がでます。」「このあたりでは、雪でも降らない限り、冬でも低いところに網を張ってコガネグモの仔は食べています。」「強い

個体は、餌の採り方が違うので分かります。」「産んだ時期の遅い卵のうは孵っても、良い場所なのに全然残らない場合があります。だから、昨年強く育ったコガネグモの産んだ卵のうの一番早い時期のやつを一番大切にします。」「(自分のフィールドに育つ) 仔グモは何万頭と見ていて、そのなかから大きくなるやつを選びぬき、数百頭の成体のなかから 3 頭を合戦に出します。」「密度が高いので、網の上で食われている個体を毎日見かけます。」「ハシリグモ(の一種と推測される) が来て、枠糸を弾いてコガネグモをおびき寄せて食べるので、天敵です。セイタカアワダチソウにはこのクモはあまり来ません。」「餌のよくかかる良い造網場所の個体を取り除くと、翌日その場所に別の個体が入ってきています。」「昨年優勝した個体は、(亜)成体を野外で見つけたもので、網の前に 20 分座って眺めていて、見たときにこれは優勝すると確信しました。」「次々に明かされる優勝クモ誕生秘話。それ以上に、コガネグモの生活史と個体差について、これだけの熱意と時間を割いて観察している人にかつて会ったことがない。くも合戦は、ナチュラルリストであり育種家であるこんな凄い人をうむのだ。」「優勝の秘訣」やフィールドの具体的地名など公開できない部分ももちろんある



網掛橋の欄干

だろうが、彼の観察は、かけがえのないコガネグモのデータであることは間違いない。年に幾度も鹿児島に通えないが、手紙等のやり取りでデータを分けていただくことで、コガネグモの成長と闘争を科学的に分析することへと、ついに踏み込めそうなところまで「出会い」がやってきたことに感銘を受けた。

大会後に行なわれたもうひとつの企画として、斎藤慎一郎さん呼びかけの「ナガコガネは闘うか」という実験があった。結論としてナガコガネグモは、棒上で小競り合いをするが、しおり系にぶらさがって「ブランコ式に」振り出しに舞い戻ってしまい、コガネグモのような接戦が展開されないという傾向が強かった。他方、コガネグモは密度の高い生息場所においては野外でもひんぱんに闘っているという谷口さんの観察もあり、コガネグモ合戦は人工的なアレンジである以前に、自然界にクモの造網場所をめぐる闘争と強さ選択が起こっているという可能性が検討の俎上にあがってきている。

ずいぶんと個人的思い入れの強い報告になってしまった。最後に、町の側で企画の実現に尽力してくださった川野威朗町長はじめ、実務方をまとめてくださった総務課の二見さん、大迫さんほかスタッフのご苦勞には、感謝のこたばをつくせない。前代未聞のクモの祭典の成功を、本当に喜んでいただけたのが何よりである。



同好会情報

ここでは日本各地にあるクモ同好会で発行されている定期刊行物の内容、採集会や講演会（総会・例会）の日程などを紹介する。興味を持たれた方は入会したり、行事に参加されてはいかがだろうか。

東京蜘蛛談話会（会長：新海栄一）

会報「KISHIDAIA」を年2回、「談話会通信」を年3回発行。採集会年4回・合宿年1回・総会例会などを年2回実施。

今年度の採集会は、千葉県市川市小塚山公園・堀之内貝塚公園周辺で実施。

2003年2月16日（日）

北総公団線矢切駅 午前10時30分集合。
世話人 加藤輝代子(047-373-3344 または 090-7012-6458)

例会は、

2002年12月1日（日）午前10時から
サン・エールさがみはら 第1研修室（2F）
相模原市西橋本 5-4-20 TEL042-755-5665
橋本駅（JR横浜線、JR相模線、京王線）下車、南口から徒歩10分 バス停西橋本2丁目

* 昨年までの場所から変更しているので注意のこと

KISHIDAIA 83号（2002.11.発行予定）

松田久司・漆原弘光・高橋 剛・志釜じゅんこう：ジョロウグモの林内での産卵部位と付着

物

池田博明：ツノナガイソウロウグモの卵のうとクラッチサイズ

新海 明・川名 興：栗本瑞見著「千蟲譜」の中の「蜘蛛」について

加藤むつみ：続トゲグモの道

八幡明彦：千葉県野田市（利根運河）三ヶ尾のクモ

池田博明：松田町自然館のクモ観察会

DRAG LINES

安田明雄ほか：千葉県館山市でアカイソウロウグモを採集

萩本房枝・萩本果南：ハラダカツクネグモがクモを食べていた

甲野 涼：ゴミグモに寄生したクモヒメバチの幼虫は裸で蛹化した！

笹岡文雄：キシノウエトタテ の一観察

新海 明：ミヤシタイソウロウグモを八王子市で採集

新海 明：神奈川県北部からのワスレナグモの記録

新海 明・金野 晋・畑守有紀：房総丘陵でのキシノウエトタテグモとワスレナグモの新産地



東京蜘蛛談話会 2002 年度合宿（栃木県那須高原）

安田明雄ほか：静岡県下田市でアカイソウロウグモを発見

谷川明男：鎌倉市にアカイソウロウグモ出現

谷川明男：奄美大島新記録のクモ 3 種

< 目録ドラッグラインズ >

谷川明男・新海 明：鹿児島県加治木町日木川のクモ

八幡明彦：鹿児島県加治木町，金山橋～龍門滝のクモ

谷川明男・田副幸子：岩手県盛岡市から宮古市にかけてのクモ

入江照雄：長崎県産クモ類目録

安田明雄：東京蜘蛛談話会 2001 年度観察採集会報告 横浜市・円海山のクモ

谷川明男・新海 明：文献による宮城県産クモ類目録

入会申し込み

〒229-0038 相模原市星が丘 1-5-5

今井正巳（事務局）

Tel 042-755-3086

会費 年 3800 円（学生 2000 円）

関西クモ研究会（会長：山野忠清）

会報「くものいと」を年 2 回発行 . 採集会・研究会例会などを年数回実施 .

例会は、2002 年 12 月 22 日（日）に大阪市の四天王寺高校または園田学園女子大学で実施 .

くものいと 32 号（2002 . 10 . 20 発行）

『くものいと』発刊 20 周年 . 編集の軌跡

吉田 真：編集者：くものいと の編集を担当して

清水裕行：編集者：「くものいと」創刊のころ

新海 明：読者：「おおきなお世話」かも知れませんが

須賀瑛文：読者：会報「くものいと」を読んでいます

フィールド紹介

山本一幸：山陰海岸国立公園内城山園地【兵庫県美方郡浜坂町】

フィールド紹介

池田勇介・幸二：津堂城山古墳【大阪府藤井寺市津堂】

同定指南

加村隆英：ワシグモ科 Gnaphosidae (その4)

加村隆英：ワシグモ科 Gnaphosidae (その5)

海外の研究トレンド(5)

柁元敏也：最初が最後 - ゴケグモ *Latrodectus hasselti* の雄の配偶戦略
クモリスト

吉田 真：亀岡岡で採集されたクモ

吉田 真：加茂町と南山城村のクモ
関西クモ研究会採集会報告

赤松史憲：京都府八幡市石清水八幡宮周辺(2002年6月2日)

研究・観察報告

吉田 真：ヒトエグモの分布記録

吉田 真：社会性ウズグモ (*Philoponella* sp.) の行動と日周期

吉田 真：アマゾン源流の半円網について

清水裕行：兵庫県におけるセアカゴケグモの生息状況に関するやや大胆な推理

船曳和代：ウズグモとカタハリウズグモが張る様々な形の網

Spider Kids

柁元敏也：Photo-Report クモ学会加治木町大会

トピック TOPIC トピック

吉田哉さんと谷川明さんが理学博士に！

清水裕行：OPINION 関西発のクモに関するホームページ

清水裕行：Essay 重箱通信(1)「過修正」と地方の読み方

入会申し込み

〒567-8502 茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学生物学研究室内

関西クモ研究会

Tel 0726-41-9555 (西川研)

0726-41-9550 (加村研)

Fax 0726-41-9432 (大学教務課)

会費 年 1000 円



中部蜘蛛懇談会（会長：緒方清人）
会報「蜘蛛」を年 1 回、「まどい」を年 3
回発行。採集会を年 3～4 回、合宿を年 1 回、
総会・研究会は、2003 年 2 月 11 日（火・
建国記念日）に実施。

蜘蛛（KUMO）35 号（2002.10.18 発行）

須賀瑛文：ちょっと覗いたあちこちのクモ～
2000 年～

須賀瑛文・矢崎充彦：岐阜県でカトウツケオ
グモ採集

益田和昌：岐阜県加茂郡白川町の倍足類

益田和昌：愛知県宝飯郡音羽町の倍足類

永井 均：ヨツボシシヨウジョウグモの産室
作成について

杉山時雄：観察会で出会ったクモたち

緒方清人：北陸・東北クモ紀行

緒方清人：ウスアカフサヤスデの小観察
短報

益田和昌：青森県十和田湖町のクロヒメヤス
デ

益田和昌：名古屋市緑区大高緑地のシマフジ
ヤスデ

益田和昌：名古屋市熱田区熱田神社のヤスデ

益田和昌：愛知県のウスアカフサヤスデ

益田和昌：瀬戸市のババヤスデ

緒方清人：ユアギグモを発見する

入会申し込み

〒444-0075 岡崎市伊賀町字 4 丁目 62-3

板倉泰弘（事務局）

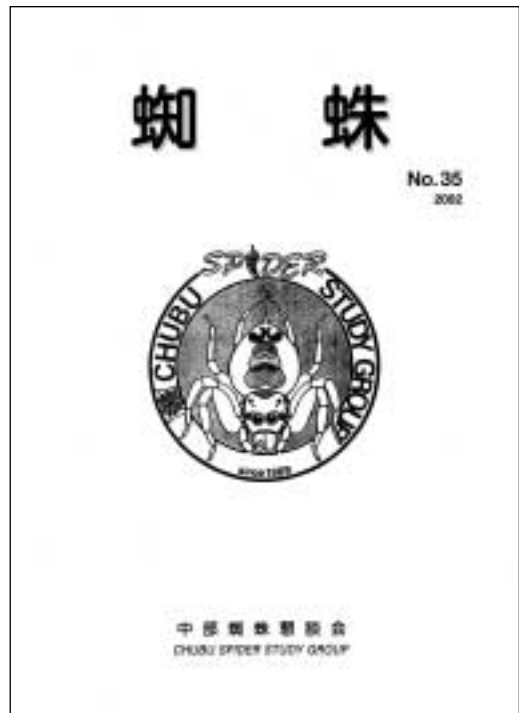
Tel 0564-28-5857

E-mail: yasuhi@deluxe.ocn.ne.jp

会費

正会員 年 3000 円(高校生以下 1000 円)

準会員 「まどい」のみ 1000 円



三重クモ談話会（会長：橋本理市）

会報「しのびぐも」を年 1 回発行。採集会・
合宿・例会などを年数回実施。

総会兼同定学習会、懇親会は、2003 年 2
月 22 日（土）～23 日（日）、詳細は後日連
絡。

しのびぐも 29 号（2002. 3. 31 発行）

内容は、遊絲 10 号を参照のこと。

入会申し込み

〒515-0044 三重県松阪市久保町 1843-

157

貝發憲治（事務局）

Tel (Fax) 0598-29-6427

会費 年 3000 円

和歌山クモの会（会長：米田 宏）

会報「和歌山クモの会会報」を年 1 回発行。
総会・観察会を年 1 回実施。

和歌山クモの会会報 No.12(2002.9.30 発行)

新海 明：ジョロウグモを数え続けて

稲田武彦：能・謡曲「土蜘蛛」について

西浦昭人：くも楽会

米田 宏：クモに関する迷信や伝説(8)

東條 清：和歌山クモの会総会と観察報告

入会申し込み

〒649-6264 和歌山市新庄 188

県立和歌山高等学校内 青木敏郎

(事務局)

会費 年 1000 円

関西クモゼミ

1~2 ヶ月に 1 回、滋賀県草津市の立命館
大学で開催。会費などなく誰でも参加できる。

連絡先

立命館大学理工学部生物地球科学研究室

吉田 真 077-561-2660

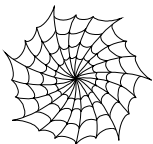
E-mail:myoshida@se.ritsumeimei.ac.jp

東京クモゼミ

毎月 1 回、第 1 日曜日に千葉県市川市の加
藤宅で開催。会費などなく誰でも参加できる。

連絡先 新海 明 0426-79-3728

または、加藤輝代子 047-373-3344



谷川明男・八幡明彦

日本最大のクモはなにかと聞かれれば、誰でもすぐにオオジョロウグモと答えるであろう。では、網を張らないクモで、日本最大のクモはなにかと聞かれたらどうだろうか。これも、誰もがアシダカグモと答えるであろう。さて、この答えは本当に正しいのだろうか。沖縄にいるアオグロハシリグモの類似種（以下沖縄アオグロと呼ぶ）は巨大である（図 1, 3）。徘徊性の



図 1. 沖縄アオグロ

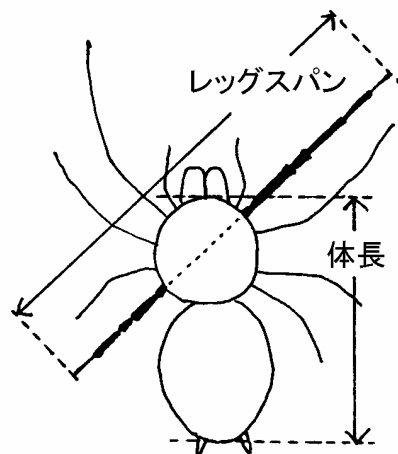


図 2. 測定部位

クモとして日本最大のものは、アシダカグモではなくてこのクモではないだろうか。そんな疑問を持ったことから、われわれは何種類かのクモの標本の大きさを比較し、日本最大のクモについて見直しをおこなった。

最大のクモといったとき、何をもって比較するのがよいだろうか。すぐに思いつくのは体長であろう。しかし、われわれが大きなクモだと感じるには、体長だけでなく、脚の長さもずいぶん影響しているように思う。オオジョロウグモが巨大に見えるのは、体長もさることながら、あの脚の長さもずいぶん効いている（図3，中央）。また、タランチュラを巨大に感じるには、脚の太さや体の量感によるところが大きい（図3，左）。足の太さや量感を簡単に数値で表すには体重が適しているであろう。われわれは、体長、脚の長さ、体重、の3つをクモの大きさをあらわす要素として捉え、何種類かの大型のクモの標本について、1）体長、2）脚の長さ、3）大きさ指数（体長、脚の長さ、体重を組み合わせて算出した数値）の3つのやり方で大きさを比較してみた。測定算出結果は表1に示したとおりである。

1）体長。体長は、上顎や糸疣を含めずに頭胸部の先端から腹部の先端までを測定し（図2）、小数以下は切り上げてmm単位までとした。体長で最大だったのは、鳩間島産オオジョロウグモ雌の49mmであった。徘徊性のクモで一番大きかったのは、奄美大島産沖縄アオグロ雌で40mm、次が西表島産ホソミアシダカグモ雌で36mm、そして屋久島産アシダカグモ雌は33mmと3番目であった。体長で、アシダカグモは沖縄アオグロやホソミアシダカグモよりも小さかった。

2）脚の長さ。脚の長さについては、クモが脚を広げて止まっているときの大きさ感を表現できるように、レッグスパンを用いた。レッグスパンは正確に定義されている概念ではないが、なるべく正確に測定できるように、われわれは次のように定義した。対象となるクモの標本を紙の上に乗せ、右前脚（第1，2脚）のうち長いほうと左後脚（第3，4脚）のうち長いほうとを直線になるように紙の上に押し付けてまっすぐに伸ばし、両脚の先端の間の距離を測定する（図2）。ただし、爪の長さは除き、測定値は小数切り上げでmm単位までとした。レッグスパ

表1. 標本の測定結果と大きさ指数の計算結果
参考として2種のタランチュラの計測結果も掲げてある

種	体長 (mm)	レッグスパン (mm)	体重 (g)	大きさ指数
鳩間島産オオジョロウグモ雌	49	197	6.7	90
沖縄島産オオジョロウグモ雌	48	198		
奄美大島産沖縄アオグロ雌	40	160	8.3	91
渡加敷島産沖縄アオグロ雄	28	167		
屋久島産アシダカグモ雌	33	122	3.1	51
横浜産アシダカグモ雄	24	142		
西表島産ホソミアシダカグモ雌	36	145	4.8	66
ゴライアスバードイーター雌	82	225	70	494
スリランカオーナメンタル雌	57	180	20	173

ンで最大だったのは、沖縄島産オオジョロウグモ雌の 198mm であった。沖縄アオグロとアシダカグモでは雌よりも雄のほうがレッグスパンが大きく、最大は渡嘉敷島産沖縄アオグロ雄で 167mm、次は西表島産ホソミアシダカグモ雌で 145mm、そして横浜産アシダカグモ雄は 142mm であった。レッグスパンにおいても沖縄アオグロとホソミアシダカグモはアシダカグモを上回っていた。

3) 大きさ指数。われわれが今回測定に用いた日本産のクモの標本において、体長の最大は鳩間島産オオジョロウグモ雌の 49mm、レッグスパンの最大は渡嘉敷島産沖縄アオグロ雄の 167 mm、体重の最大は奄美大島産沖縄アオグロ雌の 8.3g であった。これらの数値を 100 ポイントとし、体長とレッグスパンで 1 次元的な大きさを、体重で 3 次元的な量感を代表させ、両者の平均を算出して大きさ指数とした。平均値の算出にあたっては、1 次元要素（体長とレッグスパン）と 3 次元要素（体重）に対する重みづけが 1 : 1 となるように、体重のポイントを 2 倍した。すなわち、体長 A mm、レッグスパン B mm、体重 C g のクモの大きさ指数は $(A/49+B/167+(C/8.3)\times 2)/4\times 100$ となる。こ

の指数で比較すると、奄美大島産沖縄アオグロ雌が最大で 91、鳩間島産オオジョロウグモ雌が 2 番目で 90、西表島産ホソミアシダカグモ雌が 66、そして屋久島産アシダカグモ雌が 51 であった。この大きさ指数による総合評価においては、沖縄アオグロはオオジョロウグモよりも高得点を獲得し、日本最大のクモとの評価になった。

さて、なぜわれわれが大きさ指数などというものを考えたのかということ。体長、レッグスパン、体重では、それぞれ最大のクモが違っていたということが主な理由である。体長で最大のクモがレッグスパンでも最大とは限らないのである。オオジョロウグモの雌同士での比較でも、体長では鳩間島産雌の方が勝っているのに、レッグスパンでは沖縄島産雌の方が勝っている。沖縄アオグロやアシダカグモでは、体長では雌のほうがはるかに大きいのに、レッグスパンでは雄のほうがはるかに大きい。どちらをもって大きいといったらよいのだろうか。また若干脚が短くても、脚が太ければ大きく見えるし、同じ体長でも、体が太っていれば大きく見える（図 3）。このあたりの要因をすべて取り込んで判定を下すことができればと考えて、大きさ指数と



図 3. 左, スリランカオーナメンタル; 中, オオジョロウグモ; 右, 沖縄アオグロ
撮影倍率はほぼ同じ

いうものを考案した。ただ、この指数の算出のしかた、特に各要素の重みづけをどのくらいにしたらよいかについてはさらに詳細な研究が必要であろう。具体的には、1) 多数の被験者に対してさまざまな形のクモのモデルを提示し、どれが大きいかを判定してもらい、2) その結果をもとに多変量解析によって最も大きさをうまく表現できる重みづけの値を算出する、という作業が考えられる。こうして得られた大きさ指数は、「人間が感じる大きさとは何なのか?」という心理学的な問と深く結びついたものに違いない。

大きさ指数についての追求は将来の課題とし、とりあえず現時点での記録を発表しておきたい。現時点での日本産クモの最大記録は次のとおりである。

： 大きさ指数による総合評価

[$(A/49+B/167+C/8.3 \times 2)/4 \times 100$ ただし、
A=体長、B=レッグスパン、C=体重]

総合1位は、奄美大島産沖縄アオグロ雌 91
ポイント

造網性では鳩間島産オオジョロウグモ雌
90ポイント

： 体長 (小数以下切り上げ)

総合1位は、鳩間島産オオジョロウグモ雌
49mm

徘徊性では奄美大島産沖縄アオグロ雌
40mm

： レッグスパン (小数以下切り上げ)

総合1位は、沖縄島産オオジョロウグモ雌
198mm

徘徊性では渡嘉敷島産沖縄アオグロ雄
167mm

： 網の大きさ (遊絲1号参照)

東京八王子城址産タニマノドヨウグモ たて
210cm×よこ 120cm

これらを上回る記録、特にアシダカグモの標本で大きさ指数91または体長40mmないしはレッグスパン167mmを上回るものがあればぜひお知らせいただきたい。

言いたい! 聞きたい!



ついに真田町にもマダラヒメグモが

藤澤庸助

一昨年、東大で行われた大会の折に、萱嶋先生からマダラヒメグモの情報を遊絲に書くようお願いされたまま、ぐずぐずしていたが、ついに真田町のわが家に侵入するにおよんで、書く決心がついた。

マダラヒメグモは、たぶん各地で生息が確認されていると思われるので、形態と網についての説明は割愛する。

マダラヒメグモとの最初の出会いは、1988年3月末、小県郡丸子町立塩川小学校・南側窓下にくくりつけた戸棚を整理中に、つやつやした腹部の見慣れないヒメグモの一種、1と幼生2が採れた。

さっそく八木沼図鑑で調べたところ、腹背のデルタ模様の配列からマダラヒメグモであることがわかった。図鑑の説明によると、日本での初記録は、1982年2月に愛知県内とあるから、それから6年後ということになる。丸子町にはもっと早く入ってきていたと思われるが、戸棚の中の個体は全て採ってしまったので、後の約3年間は本種に出会うことなく過ぎた。

1991年4月、私が東部町立田中小学校へ転

任したところ，なんと理科室の南側の窓枠にすでにマダラヒメグモが網を張っているではないか．これは，日当たりのよい目立つ所であったが，探してみると水道の流しの下にある戸棚や教卓の下からも見つかった．白い毛玉のような卵囊もあった．数年後には 1 年生の教室などに広がっていくのだが，その経過は略する．

1995 年はゴケグモ騒動で，にわかに入々のクモへの関心が高まった年だった．以後 2 年間に，上田保健所にクモについて問い合わせが 5 件あり，そのうちの 3 件はカバキコマチグモに噛まれたものであったが，2 件はマダラヒメグモだった．もちろん噛まれたのではなく，見かけないクモだという理由からである．いずれも上田市内からで，ひとつは電機メーカーの製造工場において，台湾から輸送したビデオデッキの梱包の中から見つかったというもの，もうひとつは民家の車庫に積んでおいたスタッドレスタイヤの間から見つかったというものである．

噛まれたクモをつかまえて保健所に持ち込む人もさることながら，一般には関心が薄いと思われるクモ類のなかから，新参者を見分けて持ち込む人がいることに感心したものだ．

上の二つの事例は，マダラヒメグモが国外から侵入する経路と，その後どんな所に生活空間を見つけるかということ推測できる，格好の情報となった．

私自らが上田市内で採集と観察をしたのは，1999 年 3 月 8 日，国立長野病院の自転車置き場の天井で成体と幼体と出囊後の卵囊多数，同年 6 月 24 日，空家になっていた常磐城地区にある私の生家で成体の多数と出囊した子グモのまどいである．空家での場合は，玄関の上がりかまちの下に数個体が，食卓の下や古い食器棚の中，浴室の入り口に各 1 個体というように，暗い部分に集中して網を張っていた．食器

棚の網には子グモがまどっていたが，そばにユカタヤマシログモが待ち構えていた．明るい空間は主にオオヒメグモが占めていたが，例外的に玄関の引き戸の隅に張られていたマダラヒメグモの網の下には，ヤマトシロアリの羽蟻の残骸が多数散乱していた．

長野市では，1999 年 8 月 2 日に篠ノ井高田の味噌部屋内と，同年 10 月 4 日に松代町豊家の諏訪神社社殿で採集している．ちなみに同じ頃，南佐久郡の八千穂村では，村誌編纂主任の輿水太仲氏宅や，公民館内を丹念に探させていたのだが，見つからなかった．また，上に述べた調査期間中，上田市と東部町，長野市に隣接しているわが真田町では，梱包品の出入りの多い工場の周辺でも見つかっていない．とはいっても，工場の中へ入って調べたわけではないが．

ところが，今年（2002）の 4 月 7 日に，私の住む小集落の公民館の西側に積んであったカラマツ丸太の間から，出囊後の卵囊が見つかった．同日，我が家の車庫で 1 を，車庫に付属する物置に積んである木の板の間から，やはり出囊後の卵囊 1 つを見つけた．ということは，少なくとも 2001 年には真田町のこの集落に入っていたということになる．

以上のことから，本種は，生息範囲を田舎の方に広げてきていると考えることができる．その移動手段は，おそらく人間の経済活動による物流に依存しているのであろう．私もそのキャリアーの一人である可能性を否定できない．

7 月末には，わが家の漬物部屋（トウキョウウズグモやオオヒメグモ，ヤチグモ類など先住者が所狭しと網を張っている）の空き樽の中，北西の天井の隅，南東の天井の隅に，4，3，1 とマダラヒメグモの卵囊が吊り下がっているのを確認，さらに 8 月 29 日には，真田町役場

の公用車庫内で、空の卵囊2と幼生2、3頭を見た。(2002.8.31記)

吉田 哉さんと谷川明男さんが 理学博士に!

吉田 真

先日、日本蜘蛛学会会員で関西クモ研究会の会員でもある吉田哉(はじめ)さんと谷川明男さんが、京都大学の理学博士の学位を取得されました。お二人の長年のご研究が実ったもので、喜ばしい限りです。吉田さんはヒメグモ科の、谷川さんはコガネグモ科の分類学的研究が、博士としてふさわしいと認められたものです。京都大学大学院理学研究科の疋田先生は、お二人の学位論文の指導と審議を快く引き受けて下さいました。厚く御礼申し上げます。

吉田さんと谷川さんは、それぞれ中学と高校の教諭であり、大学勤務の私のような者に比べて、時間的にも環境的にも研究者として恵まれていない状態にあります。そのような中で寸暇を惜しんで研究に打ち込まれ、長年にわたって論文を量産されてきたお二人に対して、深い敬意をはらうものです。昔、故八木沼先生も高校教諭として学位を取得されました。その結果は、「日本原色クモ類大図鑑」に結実しています。教諭としての学位取得は、クモを対象としたものでは最近は全くなく、快拳といってもいいでしょう。吉田さんのヒメグモ科の分類に関する和文の総説も、単行本として出版される予定になっています。お二人の学位取得は、「研究職」に従事していない方でも学位が取得できることを示した点で、全国のクモ研究者を元気づけるものです。

吉田 哉さんのコメント

クモの研究をするようになったきっかけは、小学校3年生の時の理科の自由研究にクモのこの取り上げたことに始まります。それ以来のクモとの付き合いですから相当の年月になります。中学生の時、故八木沼健夫先生に手紙を出した縁で、東亜蜘蛛学会にも入会することになりました。ただ、実際にクモの分類の研究を目指したのは大学に入ってからです。当時、大阪にいましたので八木沼先生から直接指導を受けることができ、研究が進んだ時期となりました。卒業後、山形県で中学校の教員となり、細々と研究を続けることになったわけです。

少しずつ研究の成果を発表するに従い、全国のクモ研究者とのつきあいも広がり、特に標本では多くの方々から提供を受けました。教員となってから20年を越えましたが、これまでは趣味から一歩進んだようなものでした。学位をとろうと考えたのは、これまでの研究の区切りとしたかったことと「日本クモ類図説」の執筆の機会にヒメグモ科をまとめようと思ったからです。京都大学で学位論文を受け入れるとの話を吉田真先生からお聞きして、その後まとめることにしました。取り組むにつれ、新しいことが次々わかり、それらは *Acta Arachnologica* 等へ発表または発表予定です。また、学位論文の主要な部分を占める「日本産ヒメグモ科総説」は出版準備中です。

今回、学位論文に取り組んだことにより、これまでの段階から飛躍的に前進しました。とても良かったと思っています。ヒメグモ科はまだ完全にまとまったとはいえませんので今後も研究を続けます。さらに、日本だけでなく、これまでも一部手がけている台湾や東南アジアのヒメグモ類にも取り組みたいと思っています。今回の学位取得では、京都大学の疋田先生をは

じめ，吉田真，田中穂積，加村隆英の各先生，
その他多くの方々にお世話になりました．大変
感謝しています．(くものいと 32 号より転載)

採集情報

日本各地で採集された，稀産種や分布上の重
要種などについての情報を掲載する．これを讀
み，「私もこんな種類を採集しているぞ」とい
う方はその情報を是非お寄せいただきたい．

ツシマトリノフンダマシ

静岡県静岡市北 2002 年 6 月 2 日 成体 1
伴野正志

キジロオヒキグモ

東京都八王子市高尾山 2002 年 5 月 19 日
成体 1 貞元己良

愛知県豊田市自然観察の森 2002 年 6 月 2
日 成体 2 永井 均

千葉県鴨川市奈良林 2002 年 9 月 24 日
成体 2 宮下 直

スズミグモ

神奈川県大和市泉の森 2002 年 7 月 27 日
成体 1 新村 誠

神奈川県横須賀市佐島天神島臨海自然教育
園 2002 年 7 月 14 日 亜成体 1 土屋
昌利

同上 2002 年 7 月 28 日 成体 1 新村
誠

東京都渋谷区明治神宮 2002 年 7 月 6 日
亜成体 1 安藤昭久

東京都新宿区新宿御苑 2002 年 8 月 3 日
成体 5， 成体 1， 網 3 安藤昭久

埼玉県東松山市岩殿 2002 年 6 月 24 日
幼体 1 (同 7 / 7 にも同一個体を確認，網
に脱皮殻あり) 平松毅久

ミヤシタイソウロウグモ

東京都八王子市高尾山 2002 年 5 月 19 日
成体各 1 貞元己良

クロマルイソウロウグモ

千葉県柏市大青田 2002 年 8 月 30 日
成体 1・卵のう 宮下 直

島根県大田市五十猛 2002 年 9 月 21 日
成体 1・卵のう 新海 明

島根県江津市金田 2002 年 9 月 22 日
成体 1・卵のう 谷川明男



クロマルイソウロウグモ

タカネナミハグモ

熊本県八代郡泉村縦木 2002 年 9 月 15 日
成体各 1 入江照雄

採集者のコメント：このクモは，今まで「キ
リガミネナミハグモ」の和名がついていた
もの．しかし，Komatsu (1963) の
Acta, 18(1) の原記載論文によれば
Cybaeus kirigaminensis n. p.

Japanese name: Takane-namihagumo)
と和名も「タカネナミハグモ」と記載されて
いる。いつ、誰が「キリガミネナミハグ
モ」として使用されたのか不明であるが、
原記載通りに「タカネナミハグモ」とすべ
きであろう。

コケオニグモ

千葉県君津市黄和田畑無番地東京大学農学部千
葉演習林札郷作業所近辺 2002年7月23日
成体1 馬場友希

広島県神石郡神石町福永字宮地(溪流林)
2002年8月12日 成体1 八幡明彦



コケオニグモ

ムツトゲイセキグモ

千葉県野田市西三ヶ尾(湿地・雑木林に接する
柿の木畑) 2002年8月5日 成体1 八
幡明彦

オガタオニグモ

千葉県野田市下三ヶ尾東京理科大学窓公園のス
ギ・ヒノキ林で 2001年11月13日, 11
月17日 幼体, 2002年8月4日, 9月
2日 幼体多数 八幡明彦。

(新海 明・谷川明男)



最近気がついた分類関係の文献

最近発表された日本のクモの分類に関連のあ
る論文をいくつか簡単に紹介する。

: Yoshida, H. 2002. A revision of the
Japanese genera and species of the
subfamily Hadrotarsinae (Araneae:
Theridiidae). Acta Arachnol., 51:7-8.

Dipoena nipponica Yoshida 2002 タニカワ
ミジングモを記載。ボカシミジングモ, コアカ
クロシミジングモ, マダラシミジングモを *Dipoena*
から *Yaginumena* へ転属。アイチシミジングモ,
オキナワシミジングモ, ヨシダシミジングモ, ヨナ
シミジングモを *Lasaeloa* へ転属。ヤマトミジ
ングモ, アマシミジングモ, ホシミジングモ, キ
ベリシミジングモ, カニシミジングモ, クロホシミ
ジングモを *Trigonobothrys* へ転属。シロカネ
ヒラタヒメグモを *Emertonella* へ転属。

: Ono, H. 2002. First record of the genus
Anapistula (Araneae, Symphytognathidae)
from Asia. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo,
28:61-64. ハチジョウウスイロユアギグモ

Anapistula ishikawai Ono 2002 を記載した。

(谷川明男)

新刊紹介

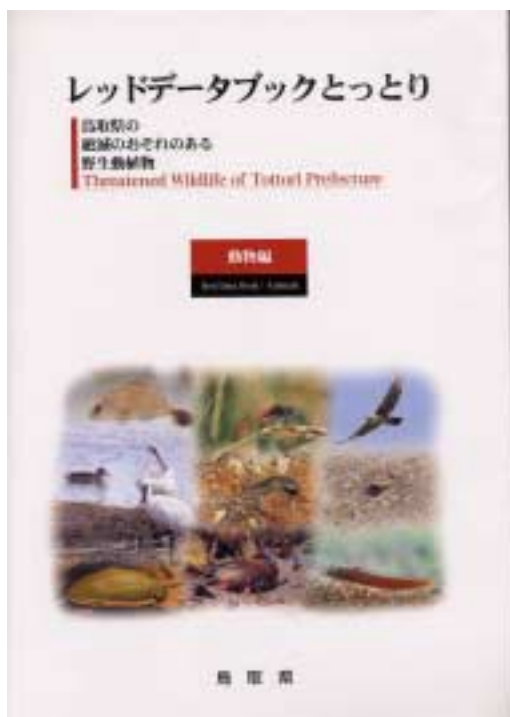
「レッドデータブックとっとり

動物編」

(本体価格 1905 円, 税込み 2000 円)

2002年3月鳥取県生活環境部環境政策課発行

今年(2002年)の7月から販売開始となっ
た, 鳥取県版のレッドデータブックです。クモ



ガタ類・多足類関係では、次の 18 種が掲載されています(この部分の執筆者は、有田立身、井原 庸、江原昭三、田辺 力の各氏と鶴崎の 5 名): キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ワスレナグモ、ダイセンヤチグモ、イソコモリグモ、カロナギサダニ、スナヒメハダニ、ダイセンニセタテツメザトウムシ、ゴホントゲザトウムシ、ヒコナミザトウムシ、ヤマスベザトウムシ、ヒライワスベザトウムシ、イラカザトウムシ、アカサビザトウムシ、オオナガザトウムシ、フタコブザトウムシ、コヤマホラケヤスデ、クビオビヤスデ。

鳥取県内の主要書店で入手できますが、県外の購入希望者向けに直接販売もしています。購入ご希望の方は、冊数、氏名、郵便番号、送付先住所、電話番号を明記のうえ、電子メール、ファクス、またはハガキにて(電子メールをお使いの方は、なるべくメールで)、下記までお申し込み下さい:

鶴崎展巨 : E-mail: ntsuru @ fed. tottori-u. ac.jp. Tel & Fax: 0857-31-5110 (直通) 〒680-8551 鳥取市湖山町南 4-101 鳥取大学教育地域科学部生物学研究室

なお、この直接販売分については 1800 円/冊の割引価格で提供しますが、郵送料・梱包料(1部注文の場合で 600 円)が別途かかります。支払いは本が到着後、本に同封する郵便振替用紙(払込料 70 円がかかります)をお願いします。(鶴崎展巨)



ギャラリー



『わっ』

西表島にて撮影。オビハエトリグモ属の一種。(谷川明男)



遊絲 9,10 号会計報告 (2001.8~2002.7)

収入	
寄付	70320 円
学会補助	14500 円

繰越金	4970 円
合計	89790 円
支出	
遊絲 9 号送料	23760 円
遊絲 10 号送料	23940 円
紙 / 封筒 / プリントナー	31530 円
小計	79230 円
次号繰越金	10560 円
合計	89790 円

日本蜘蛛学会

入退会は

庶務幹事

305-8604 つくば市観音台 3-1-3

農業環境技術研究所昆虫グループ内

田中幸一

Tel: 0298-38-8253 (Fax: 0298-38-8199)

E-mail: tanaka@niaes.affrc.go.jp

会費の問い合わせ及び住所変更は

会計幹事

170-0004 豊島区北大塚 3-12-21

笹岡文雄

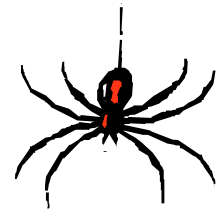
E-mail: spydm@big.or.jp

Tel 03-3918-1945

年会費 正会員 7000 円 (学生は 5000 円)

郵便振替口座 00970-3-46745

ホームページ: <http://www.asahi-net.or.jp/~hi2h-ikd/asjapan/index.htm>



編集後記

遊絲が発行されてから 5 年がたちました。原稿のこと費用のことなど大変だった日々もありましたが、なんとか 11 号までたどりつきました。遊絲は会員の寄付で成り立っています。この声援に答えるべくこれからもさらに誌面の充実を計りたいと考えています。投稿の方も宜しくお願いします。

本誌面に掲載されたクモギネスも楽しいテーマだと思います。クモの持つさまざまな性質についての「これが No1 だ」という「自分だけの思い込みによる」投稿も大歓迎です。そこから、また新たな発見や研究が生まれることだって考えられます。お待ちしております。

(新海 明)

原稿送付先

〒192-0352 八王子市大塚 274-29-603

新海 明まで

E-mail では dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp (谷川明男) まで

発行は、年 2 回 (5 月, 11 月) の予定。締切は発行月の前月末日です。

遊絲 第 11 号

2002 年 11 月 25 日発行

編集者 新海 明, 谷川明男, 池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 吉田 真
